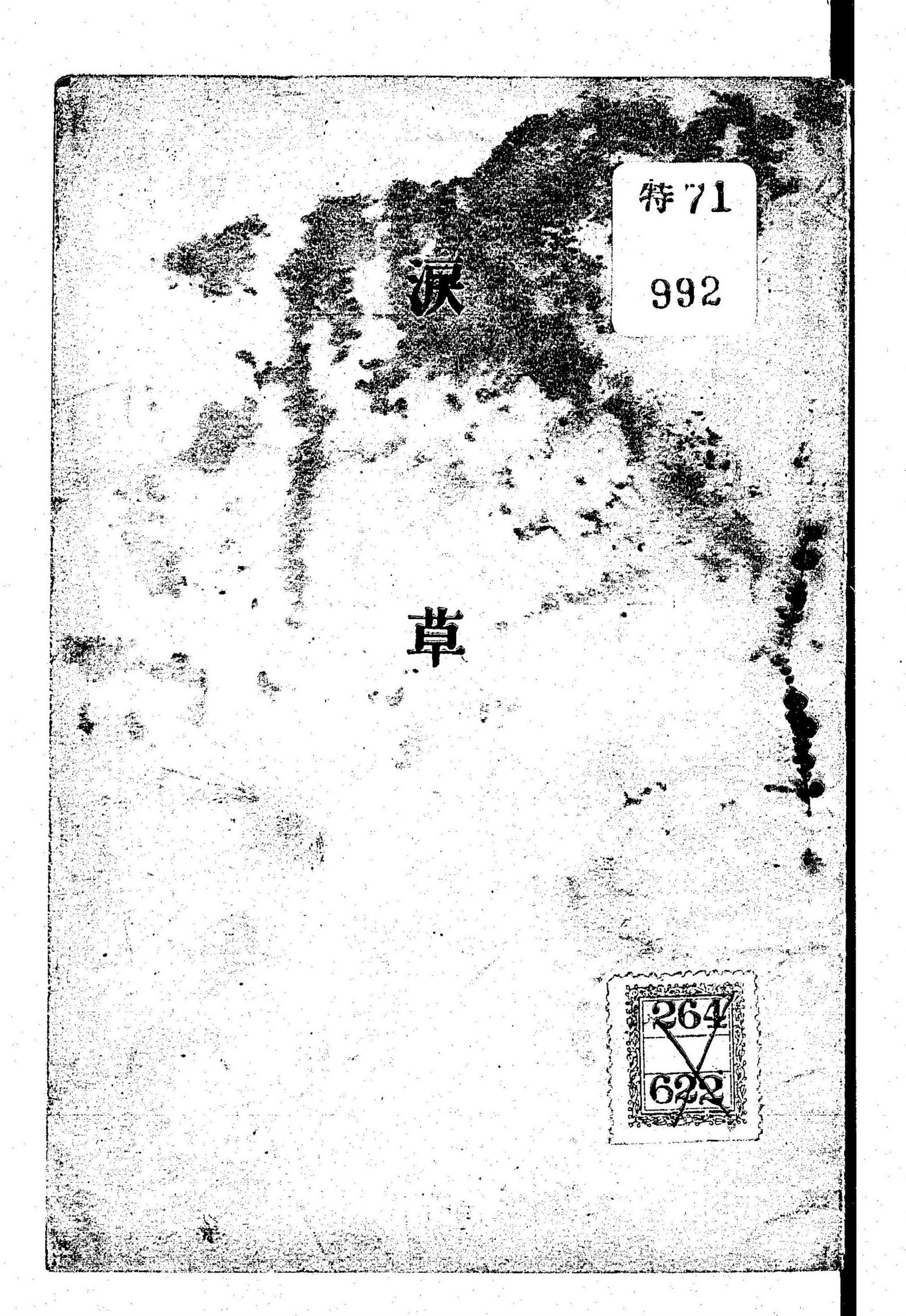


301535-001-4

特71－992

涙草

京極 伊知子／著

M43.12

DBR－0001

# 涙草

明治
44. 1. 7
内交

特71
992

本書は雲州松江城主京極忠高の女伊知子（澤昌院）の著はす所なり、伊知子は寛永八年重臣多賀宮内の室となり、一子（頼母）を擧げしが、正保元年宮内歿後五年にして、其子君侯の養ふ所となり、程なく江戸に下るときなれり。是より先忠高卒し、嗣子なくして國除せられしが、台命によりて弟高政の子刑部少輔高和に播州龍野城を賜はれり、高和乃ち後事を慮り、是に至つて頼母を養子とす。本書はこの母子映別前後の狀況を叙したるものにして、文辭は頗る悲哀の情に充つ。伊知子は萬治三年四月廿七日を以て懷州丸龜に卒し、南條町法華寺に葬り、隆して澤昌院殿英林宗繁大姉と號せり。

# 涙草

京極少將忠高女著

それ人のむやのこを悲しむ道は、思ふにもあまり、いふにも詞たらざるべし。山野のけだ物、かうがのうろくず、空をかけるつばさ、つちに生るたぐひまで、すべてゐきとしいけるもの、形はことなりといへども、心ざしはかわるべからず。いはんや人として上がかみ下がしもまでも、子を思ふ心のやみはひとしかるべし、こゝによう〳〵よはひかたぶく身に、一人のなんしをまうけぬ、めづらかにらうたき物かし。夜光きん玉の心地して、袖より外にははなしがたく、朝夕ひざの上にのみあつかひまほりぬ。なまさかしき女ばらの、さしあつまりて申けるは、あまりゆゝ

かしきまで、うつくしう、御ちゐもほどよりは過ておそろしきみえ給ふに、かゝる御ちこをいは、いやしき民の子にしたてまつりて、名をつけたるはなん、御命もながくおはしますものなりと申ければ、人のきこゆるまゝに、わくむらといふ里より、二郎ゑもんといへるかたわをよびてなをつけさす、をのが心にまかせて、さま〳〵の悦事ども（祝ィ）さへづりいでつゝ、賴母の助と名づけぬ、やう〳〵いかもゝかも過ぬれば、日々に物をひきのぶるやうにおよすげまさりて、いとしきようにうつくしく、つぶ〳〵とこへて、わらいがちにものがたりなどし給へば、父のいとをしみ中〳〵いふばかりなく、夜晝抱きいつくしみ給ふほどに、年もくれ春にもなりぬ、いとうつくしうおとなび給ふて、愛きやうつきたる物まねび、らうかわしく、はいはつはれ給ふを、父もろともにこの君をかしつき草にて、いつしかありき給はん事を待日にして明し暮しけるに、その夏の中頃よ



り、ちゝ君の心地わづらひ給ふ、おどろ〳〵しき病にもあらず、そこはかとなくなやみ給ふそ、年月もかようにあつしくのみおはしけれども、たび〳〵さわやき給へば、さにもこそはとしばし心みるに、をこたるけしきもなく、日にそへていとくるしげに見ゆ給へば、いかなる事にかとおどろきさはぎて、もとより藥の力はこれかれもてあつかいけれども、かわるけぢめもなければ、京よりさるべきゐし（醫師）よびくだし、ずほう（修法）、どきや（讀經）う、まつり、ばらへと、心のいたらぬくまなく、さま〳〵の事をしつくしけれども、いさゝかのしるしもなく、まさるさまにのみおもりて、佛神の祈（行ィ）もかなわず、かげとめんかたなきにかなしかりける、ふみ月中の八日つひに空しくきへはて給ふ、年三十七にぞなり給ひし、さりともかゝる事あらんや、ゆめかと思ひてうつし心もなく、ふもひのとめんかたなきまゝに、しばしもおくるまじう、同じ道にとまとはれけれども、世にとまる（後ィ）

べきほどは、かぎりあるわざにや、しなれぬもあさましう、やう〳〵人心地も出できて、思ひしづまるにしもぞ、うき事のためしなりける。ふしても起ても涙のいとまなく、きりふたがりて、はかなく過る日數につけても、かなしさのつきせず、いかでかくながらへける月日ならんと、心をさめんかたなし。

絶はてぬ命につゝきおくれしと涙の淵に身はしつめども
有し世はまくらのちりもいとひしにひとりやこけの下にくちなん
歎わひみしは夢そと思へともさむるうつゝのなきそ悲しき
よそにみしお花か露も此秋は我か袖よりそこほれそめける
殘ぬる身のうきなから明暮て日かすふるにもなきそかなしき
夕くれの空にたゝよふうき雲やはかなき人の行ゑなるらん
袖の露もはらひにかぬる思ひ草しけれる宿の秋の夕へは





ゆふ月夜の出ると見れば、はどもなく山のはに入はつる名殘も、人のわかれめきて、

をしめとも月はむなしく入はてゝやみに殘れる身はいかにせん

三十あまり七年過し秋ことになかめし月もあたし世の夢

さらてたに秋の夕へは悲しきになき人こふるあさちふの宿

うきみのありさま、つく〳〵思ひつらぬるに、もとのねざしはくちをしからず、むまれながらいはけなきより、おやなどいふ人のあたりもしらず、人よりことにくちおしき身にもありけるかなと思ふ事たへず。中頃あづまにくだりて、年をへて戀しく思ひ渡りし人々の御あたりを、たまさかにたつねよりて、たのもしくうれしと、やゝ身のうさもなぐさめつべきほどもなく、たのもしき御かげともにおくれたてまつりてこのかた、身のたつきなく心細きにつけても、この人をこそ頼み渡りしに、うち

すてられて、きしかた行さきためしあらじとおぼゆる悲しさをも見つるかな。なに事なく過こし、年月もうらなくたのみかわして、折につけたる花紅葉の、色をも香をも同じ心に見はやし給ひ、新にこそなぐさむ力も多かりしに、定めなき世と云ながら、おくるゝほどのかなしさは、よにまたたぐひあらじと、空よりをちぬる心地すれば、ながらふる命もくち惜しく、身もうらめしく、世の中にあらんこともひとへにつらく覺ゆれば、むかし人もかゝるうき事のまれにこそ、さかりの身をもひたすら背きはてゝ、なき人の菩提をもとひ、我身の後の世をもねがいて、浮世にあとゞめずなりなばやと、百千たび思ひたてど、いわけなき人の、よろづもしらずがほにあわれなるありさまをうちすてんもかなしく、あに君も二八にこそなり給へれ、世のありさまをも、またおさ〳〵知り給わず、われさへ見すてなば、たつきなく心ぼそかりなん。この人々を心やすく見





ゆつる人もなくて、殘しといめんは心ぐるしく、且はなき影の見たまはんにも、歸てつみやねんと思へば、身を心のまゝにもなしがたくて、あさましう、あけくらさるゝは月日なりけり。

うつゝれしこけの下にもいかはかりこはきか上を思ひおくちん

さらぬだに、秋の夕べはわびしきに、ましてぬしなき宿は庭もまがきもあれたる心ちして、露ふきむすぶ原の、すゑこす風もはだ寒く、涙催す虫の聲々、とり集めたる悲しさは、たへてあるべき心地せず、暮ゆけば十五夜の月ながら、千里の外もすむらんと、限なき空を眺めても、思ひ出る事、多くて、まづかなしくなん。

有しにもあらぬうき身の秋の空月はかりこそ昔なりけれ

心あらはなきかけつれてやとれ月ひまなくこふる袖の涙に

ともにみし十とせあまりの秋の月こけの下にも思ひいつらん

夜もやう〳〵長くなれば、ふけ行けはひもあはれなるに、枕に近きむしの聲々、かしましきまで亂れあひて、いとゞ物心細くなん。

聲たてゝなかぬはかりにきり〳〵すわれも涙は音なしのたき

何ばかりのよわひにもあらず、盛りの身にて、心苦しきほだしどもをうちすて給へば、いかにこの世離れ難く、よろづに名殘もとまらんかしと、なく〳〵こゆらんしでの山路まで思ひやらるゝに、いかで罪輕くなり給ふばかり、をこないもせまほしくて、ぢぶつのかざりとゝのへ、ねんずを心にいれつゝ、ひま〳〵にはこの君のもてあそびて、わづかにあゆみなどし給ふを、いみじくうつくしく、ちゝの形見と思ふにも、ひとかたならぬなぐさめになんありける。

朝露のきへし形見と思ふにもなほむつましき山となてしこ

しての山行て歸らぬ道柴の露うちはらひ君やこゆらん





この君三つに成給へば、かみをきさせ奉らんと、そのほどの事ども心まうけして、霜月十六日よき日なりければ、親しきかぎり上下の人々集りて、賑しく祝ひことどもして喜びあへり、この君には身づからよろづとりまかない、さま〳〵のあに物、鶴亀かきたるもとゆひなどとりぐして、

萬代をかけても結ふこむらさきはつもとゆひに長きためしを

月日そへて、此君のうつくしうをいまさり給ふて、今よりもの〳〵しく、あでにあいきやうつきて、ざれ遊び給へば、うれしき物から、いとゞらうたくて、心地のあしくものむづかしき折も、この子を見ればなぐさみぬ。腹立しく物うらめしき時も、うちゑまれなどして、誠に身のうきふしみな忘れぬる心なんしける。五つに成給ふとし、袴ぎの事いそぎたちて、むつの朔日にきせ奉る、いとゝいきようにゆゝしきまで見わ給ふを、誰もたれも涙落して見奉る、ましてかくふとなしうしたてられ玉へる美しさ

を見るにつけても、父の見給はぬ事の口惜く、かゝる身をもろともにあつかひたまはぬ悲しさ、よろづかきあつめて、なみだもとゞめ難きを、けふはいま〳〵しくやとつゝみかくす。

枝しげみこ高き千世の行末はけふより見ゆる春の若松

千とせふるよはひも兼てみゆる哉けふたちそむる鶴の毛衣

としのまさり給ふにそへて、心ばへのなづかしく、あいきやうづきて、はかなき遊びわざの中にも、心おきてのうるはしく、今よりけだかくゆるやかに、あまりおそろしきまでさかしくをい出給ふ。父をばもとよりみぬ物にならひて、こひしとも何とも思ひたまはず、たゞ明暮かたはらさらずなれまつわして、むつれ遊び給ふ。物心もしり、をよすげ給ふまゝに、ふやをば大事に思ふ物ぞと心に給ひて、幼心になにくれとはかなき事につけても、かう〳〵のおもむき今よりこまやかに、いふばかりなき心



ざまを、あわれに嬉しき物から、たのもしくて、たかき山とまほりつゝ、春の日の暮しがたきにも、この子に戯れなぐさみて、年暮ぬる心地し、秋の夜のながきにも、おましのあたりちかくふして、かいしやくするにひかされつゝ、はかなくあけぬる心して、この君のかしづきに、よろづ心のいとまなく過行ほどに、此君六つに成給ふ。その比刑部の君は此度ゑどにて、あづまに渡らせ給ふおほせ事にて、佐々九郎兵衛のせうより、む月の末にせうそくありけり。なに心なく開き見れば、刑部の君に未だ若君をはしまさず、なべて人のする事にて、まじないによき事ときこしめせば頼母の助を御子になさせ給ふべし、おとりみいでゝ、若君出き給はゞ、この君をばくぼふの御身ちかきめし使人となし給ひて、姫君たちおわすれば、御むことなさせ給はんとなり。うちみる心地いはんかたなく嬉し。かゝる御さだめときゝて、所にある人々、高きも下れるもさゞめき渡り

て、我も〳〵と道もさりあへず、門外も所せきまで集り悦給ふ。身づからの心は、ましてとし月かけても思ひよらず、かゝる幸は願ひても有まじき事なれば、かぎりなく嬉しきものから、さすがに朝夕見てもあかず、片時見ぬも戀しきに、ばる〳〵と別れなば、戀しさをいかにせん。かぎり有我命もいかでながらふべきと思へば、今より胸つとふたがりて、ともすれば涙の出くるに、我ながらあまりなる心なりけり。昔我父忠高の君、くぼうの御ふぼねゐみじく、出雲隱岐両國を賜はり給ひて、肩を並ぶる人もなかりしに、四そぢにあまり玉ふまで、代つぎの御子持ち給はで、いかなる事にや、とり子さへせざせ給はず、俄にはかなくかくれ給へば、御かげをたのみぬる數多の人々、闇に迷へる心地せしに、天下の君の御惠ありがたく、御なさけ深くおはしまして、御憐のあまりに、この刑部の君をめし出して、この所をくだされ、家を繼しめ給ふゆへ、ねさらぬ人々はつき奉りて、御名字つゝがなし。かやうの事どもにうんじ給ふにや、この君の事をかく定め給ひて、くぼうの御身ちかく世のふもしと成給ふ。さりぬべき人々の誰も〳〵うけひき給ひて、天下の下にて事定まり、こゝさら北の御方の、此君ならではとせちに床しき事におぼしの給ふきけば、行末までも頼もしく、かく思ひかけず、空より出きたるやうにて、のがれんかたなき幸も、さきの世の契りふかく物し給ひて、佛神の御ほふへんにこそと思へば、我身はとてもかくても、この君の御ためさへよからまし、かばと思ひねんじて、愈よ此君をなでかしづけてあかし暮すに、刑部の君はその年つねよりはやく御暇給はり給ひて上らせ給ふほどに、彌生の十四日には所につかせ給ふ。この君の御事は、卯月廿一日よき日なりと暦の博士考へ申ければ、やがて其程に入れ奉るべくきこゑ給へば、なにくれと急ぎたちて、其日に成ぬれば、この君を心ことに美しくつく

ろいたて丶、身づからぐして入れ奉る。御あるじかたにも、刑部の君の御母上、こゝにも姫君おはしければ、あるべきかぎりきようをつくし、さほうよにめづらしきまでもてはやさせ給ふ。いつかたも〳〵もはじめてたいめんしたてまつれば、かたみにはぢらいながら、あるべかしき御物語すこしきこへて、あるじの御まうけいかめしう、樣々御心を盡して、もてかしづき給ふ。御かわらけ數多たびめぐりて夜に入ぬれば、御さかもりになりて、賑はしく歌ひ舞ひて、上下ゆすりて目出たく悅たてまつる。夜ふけて御暇申まかでぬるに、おくり物どもしな〳〵、ろくどもあまたたび賜ふ。かくて後は心安く、晝の内はあなたに參り給ひて、暮るればまかで給ふ。遊びわざにかこつけて、里がちにのみおはすれば、かわるけぢめもなく、心おちいて、うれしくなん有ける。江戸へは年明春の比、御父君のぐして下り給ふべしと定まりければ、心をのべて嬉しきものから、日





の暮れ夜の明るもしづ心なく、過る月日もいつしか長かれとのみ思ふも、我ながらはかなくなん。光陰は惜めども、止まらぬ物なりければ、夏過ぎ秋たけて、冬の初になりぬ。江戸には北の御方の御うばぎみ松壽院と申奉る、日比なやみ給ふて、秋の頃かくれさせ給ふ。御愁歎の御涙未だ乾かせ給はぬに、打つゞき御くま御前と申奉る姫君、三つにていとはかなくうせさせ給へば、いとゞ御悲のひるよなく、さら〳〵しき事におぼしめして、御涙がちに暮らさせ給ふ。かゝる事どもをしゆりんの君きかせ給ひて、いと心苦しき御事にもあるかな、そう〳〵しくおぼさば、かのやうし若君を近き内に迎へ給ひて御らんせよ、さもあらば自づから御心も慰み玉ひなんと、きこへかたらい給うて、急ぎ御消息上せ給ふ。此御使神無月初頃になん來つきける。刑部の君の御方へも、九郎兵衛のせうへも、かゝる御事くわしうきこへ給ひて、急ぎ若君を下し給ふべく懇にの

給ふ。こなたには誰も〳〵しふ〳〵おぼして、いかでかく寒空に、幼き人を遥々と下し奉るべきなど、思ひ煩ひ給へども、江戸より重ね〳〵せうそこ上せ給ひて、まめやかにせめ渡り給へば、いなみ難くて、下り給ふべきに定まりぬ。かくいふは十月廿日頃になん有ける。うちきく心悲しなどもいふばかりなし。ついにかゝるべしとは兼てより思ひもうけし事なれども、さすがに昨日今日とは思はず、さしあたりてはいかにせんと思ふ。誰も〳〵涙にくれまどひて、かつはいま〳〵しきやう也、さのみ心弱くてもあるべき事ならねば、思ひしづめて、よろづをおきていとなみ下り給ふべきほどの御用意はゐるべき調度、何くれと上〳〵もの事までも、刑部の君よりおきてさせ給へば、只こなたには、御ぞども縫い、うち〳〵の細かなる事までをぞ扱ひける。佐々九郎兵衛のせう、もとより心ひろふ有難きまで情深き人にて、何事の折ふしにも、まめやかに心よせ





給ひて、この君の御爲思ひいたらぬくまなく取もち給ふ。思ひやりふかく物なれたる人にて、内々の細かなる事までも、心に入れて扱ひ給ふを見るぞ哀れに、頼もしき人の心にも有かな。おやなどさへもとよりおろかなるゝ、かくまであらぬわざぞかしと、身に濕みて娯しきにも、この人の心ばせよ、人にはすぐれぬるゆゑにこそ、忠高の君はやうより人にまさりて、あわれなるものにおぼしめして、また比ひなく使ひならし給ひける。その御なさけを深ふ思ひしりて、身を捨てゝ此刑部の君につき奉り、今の代までも御主の御爲ほふこうのちうを盡し、朋輩の爲に愛憐深くて、よろづの道を正しくつかふまつり給ふゆゑに、その名四方にかくれなくて、天とうの御恵にも叶ひ給ふぞかし。忠高の君敢なく夢のやうにてかくれ給ひしことの胸に充ちて、御なさけの忘れ難き餘りに、この君の老さきまで心苦しく、覺束なき物に思ひ給ふて、我命の内に、とても

かくても行末たのもしくねさらぬすぢになしおき奉りて、心安く見置かんとて、この事をもあながちに思ひたちて、こゝかしこ、さりぬべき人々にもことわり頼み給ひて、かたつかたの人のうらみもしらず顔に、急ぎてかく物し給へば、さるべき事とは言ながら、單へにこの人のをんぞかしと思ひ知るにも、いとゞ感涙ふさへ難くなん、此君はいかにおぼしする事にか、些か別を悲しとも思ひ給はず、ひたすらくだり給はん事をうれしき事に思ひ急ぎ給ふて、はかなきもて遊び物を人の奉るをも、これは江戸の御母上のさゝげ物にこそせめと、したゝめおき給ひつゝ、我も江戸の用意に暇なしやとのたまひて、走りありき給へば、いとをかし。よのつねの小供のやうに、親のあたり離れがたく慕ひ悲み給はゝ、今ひとへ思もまさりて悲しからましを、中々心安き物から、さすがにかう何心なくいわけなきありさまに、引分れ奉らん悲しさは、やるかたなくぞ





ありける。江戸の北の御方の御心ばせ比なく、女の御身にはめづらかなるまでおはしますと、誰も〳〵ほめかんじ奉るを、日頃聞き及にし御事なれば、さりともかゝるらうたきありさまを、おろかにはよもおぼしめさじとたのみながら、むげにちごならぬよわひにて、まだはかばかしく人のふもむけをもみしり給はず、なかそらなるほどにて、數多の人の中に立ちまじり給はん事は猶覺束なく、後ろめたく思ひやらるゝ、よろづ心のひるよなく、かきあつめてふもふにも、胸あくべくもあらず、ねをのみなきて、日をおくりける。斯くて霜月十日あまりにも成ぬ。下り給ふべき吉日など、さるべき方にて時とらせけるに、十九日吉日なりけり。已の時に立給ひて宜しかるべしと申ければ、さらば今いくかにこそありけれと、日を數へつゝ、泣より外の事なし。十六日には父の御墓所へ詣でさせ奉る。華やかに裝束きせ奉りて、なでつくろいて出し奉り、名殘もいと

どながめられて、あわれ父のながらへましますせなりせば、此御事をも
萬かひある樣にもてなし給ひて、めやすきうしろみならまし、この度の
道をも具してこそ下り給ふべきに、うらめしき世のならいかな、誰もの
がれぬ事ながら、おくれさきだつほどは、猶いふかひなかりける。草の陰
にてもいかばかり悲しと見給ふらんと、過にし方の悲しさも、今さらの
やうに思ひ出て、涙も止め難くなん。

わかれ行く涙のかゝる衣てをこけの下にもいかにみるらん

もろともに行へき身にもならなくになみたはかりやさきにたつらん

いかにせんおそふる袖の涙さへとゝめかねぬる人のわかれを

十七日には、所の氏神へかどいでに詣でさせ奉り、さるべき所々にも御
まかり申させなど、まきはしき事ども過して、十八日には、心のどかにお
はしまさせて、髪洗ひ、御ゆひかせ奉り、げふばかりこそと思へば、御くし



けづりに、おひとめ、よろづの事を身づからかひしやくしたてまつりて、
なでかしづけてそひ奉る。思ふ事どもとやかうやと、いわけなき御あり
樣にいふべきならねば、めのとにとかくかたらひ聞かす。めのともとよ
りきたなけなきに、此君の御蔭にて、樣々の物賜ひ、使人もとめなどして、
身をかへたることくになりいでけれども、老たる親、稚なき娘などのこ
して、はるゝをも下らん事、年月は心安くならひて、俄にやん事なく、し
らぬ人々の中にましらひ、うゐ〳〵しくやすからず有べきかなと、心も
ゆかで泣しほれけるを、かつはいひ慰め、有べき事どもおしゑなどして、
日も暮ければ、こよひばかりと思ふにも、名殘せんかたなくてありけり。
日頃はいとよく思ひのとめて、我身はとてもかくても、此君の御爲さへ
よからましかはと、とさまかうさまに思ひ慰めつるを、今夜と成ては、越
方行末何事も覺ねず、かきくらす心地して、悲しなども中々やるかたな

くぞ有ける。此君をふところにふせ奉り、はかなき親子のきゐんかな、せめては十とせあまりまで、身にそゆる事ならで、かく幼なき有樣を、遥々と引はなれ、ずるの露、もとの雫のためしにて、おくれさきだつならひあらば、これぞ此世の親と子のかぎりの分れなるべき。父には死して離れ、母には生て別をなし、人と成給ひても、まことの親の面影は、いかで覺ゐ給ふべき。あわれ悲きかな、此君を生おとしてこのかた、一日へんしも身をはなさず、人のもたぬ子をもちたるやうに思ひて、きうか三ふくの暑き日は、扇の風を招き、泉の水を掬ひても、猶涼しからん事を願ひ、嚴冬そうせつの寒き夜は、褥を重ねて暖に、隙間の風を防きても、まだ夜や寒きと心を盡し、晨起ては初花の開たるを見る心して、猶床夏の匂なつかしく、あけても暮ても此君をまつはして、身の憂をも忘れしに、今別れ奉り、明日より後の戀しさは、何によりてか慰まんと思へば、涙も所せく床も枕も浮くばかり、鳥と同じくなきあかす、心の内の悲さは譬て云はんかたぞなき。千秋を一夜に重ねても、長かれかしとは思へども、空しく其夜も明ぬれば、御供の人々集りて、いと物騒し。此君もいかゝおぼすにや、今朝は例のやうにもおわしまさず、うち靜まり、まめたちておはしませば、いかにおほすといとおしくて、誰も〳〵鼻すゝりがちに、いやめなるを見たまはゝ、うちなきなどもし給はんにそ、かつはいま〳〵しと制し止めて、身づからもせちに思ひねんじつゝ、御心につくべき事など云なぐさめまぎらはして、げさの御まうけぐご奉り、御かわらけ取かわしなどして祝奉る。日もたけければ、旅の御裝束着せ奉り、髮かきなでゝ、心靜かにかいしやくしたてまつりて、御父君の御方まて出し奉る。佐々九郎兵衛のせう、あわれしのばぬ人にて、かゝるわりなき心の内を推量り給ふにや、なにか苦しかるべき、近き所までうち送り給ひて、道行ふりを見給

へかしとの給へば、いと嬉しくて、急ぎまふでつゝ、片山といふ所に待見奉る。道のほど萬のさほふ、日比御父君の下り給ふぎしきにもやゝうちまさりて、道々清め眞砂を布き、所にある人々は、高きも賤きも我劣らじと御送りに出給ふ。名字をも人にしられ、なをもかぞへらるゝほどの人は、一人ものこらず、其外町人以下いげざいい〳〵しよ〳〵の庄屋まどころまでも、我も〳〵と罷り出でゝ、ひますきまもなくなみ居つゝ、まほりあけて拜み奉る。からようにうつくしくめでたき御ありさまを見るには、おもたゝしく嬉くて思ひよらず、かゝる御幸も、日頃たのみ奉る佛神の御憐みにありけん、なにのたけきことありて、自からあながちにわりなくをしみ奉るも、われながら惡き心にかし、あまりにふくつけき事は、神も惡しとおぼしなんと思ふにも、こよのふ力いできて、此程の思ひしづみし胸も明きぬる心地す。君うち出給へば、御だうぐどもきよらをそろへ、





御供の人々に御あとさき右左ぎやうぎ正しくうち靜まりて歩ませ給ふ。ほど近く成給へば、乘物さしよせて、御暇乞し奉る。今まで萬慰みし心もいつしか失せはてゝ、目もくれ心も消るを、今一度としぼりあけて見奉る。此君もいと名殘惜げにて、なみだを一目うけながら、なきなどもし給はず、さすがにほゝゑみておわす。物きこへなどすれど、例のやうに御いらへもし給はず、うなづきておはしますを、めのとうたてと思ひて、いそがし出れば、心にもあらずひき別れ奉る。名殘悲しともいはんかたなし。人めもしらず聲を立てつゝし。御うしろのかくるゝまで見送りて、泣より外の事なし。かの松ら佐用姫が、もろこし舟を慕ひかねて、びれふしけん古へも、今さら思ひやられて、涙と共にかへりきぬ。親しき人々集り給ひて、さま〳〵に慰め給へども、いとらうたげなるかほばせにてうち涙ぐみ、名殘惜げに見をこせ給ひし面影の、身につとそひたる心地して、

せんかたなくぞありける。いでゐり遊び給ひしつま戸のあたり、殘し置給ひし遊のてうど、ぬぎ置玉へる御ぞ、みるにつけても涙の種と成て、わきかへる心地ぞする。かつはいまゐしきのみ、なげかしと思ヘ見ねども、心にも從ハず、涙より外にかこつがたなかりける。日暮ければ、夜のおましにふしぬれども、床のあたり物寂しく、有し夜の悲しさは中々物數ならず、胸せきあくる心地して、長き夜すがらいとゞしく、夢みる程もまどろまず。夜明ぬれども、猶あきれたる心地して、いかにせんとまどはれつゝ、たけとりのかぐや姫、雲のはたてにのぼりにし、宮つこまるが別れまで、我身の上の心地して、思ひ殘せるかたもなし。霜枯の前栽を眺むれば、此君のてずさみに植をき給ひし小松、ねざゝ、ちいさき草木どものあをやかにて、いくしもあるを、今は形見ぞかしと思ふにも、植給ひし面影の給ひし事どもの、まづ思ひ出られて、涙のもよほし成けり。親しき人々日々に





打より給ひて、かゝる御名殘は、よその袖さへなぐさめがたふさふらへば、ましていかにと思ふにも、御ことはりにはさふらへども、今いくほどかはんべるべき、ふとなしくならせ給はゞ、めで度思ふやうにて上らせ給はんそのの程は御身を平に念じ給ひて、對面をこそ待奉りたまはめ、且はゝいまはしき事なりとなぐさめ教訓し給ふ。さることゝは思ひながら、とふにつらさの涙は今ひとへまさりてなん。

おくるまのめくりあふせもたのまれず我玉のをのかきりしらねは

心行たひのわかれと思へともつゝみかぬるは涙なりけり

あに君もその日のとまり、御著ごちやくといふ所までうち送り給ひて、又の日夕つけて歸給ふ。道々萬の事を御らんじなぐさみて、御心よげにおはしまし、いとめやすき事になんとかたり給ふ。この君たち、中こそ又たぐひなきはらからにて、ふとなびき給ふまゝに、かたみにあはれとかぎりな

く思ひかわして、とし月はおやにもなりて、はごくみ給ひしを、俄にひき別給ひて、心細くさう〳〵しと、兄君の思ひぐし給ふもことわりに、いとおしくなん有ける。此たび御供に下せしかうばの母なんこゝにもありて、同し心に慰めがとう思ひむせびけるを、さにかもふらん、此君のいとやん事なくさたまり給ひて、道々もあまたの人々つき去たかひ乗り、なのめならず思ひかしづき給ふべき人の待をはするをだに、さしあたりて名殘かなしさはいはんかたなく、心もおさめられぬぞかし。ましてかれが身にては、いかに悲しく思ふらんと、あはれに心苦しう、これのみにもあらず、此度御供にこをやりしおやは、いづれか愚なるべき、こゆへの闇は同し心にこそと思ひやらるゝ。

かわらしよ高き賤しき人のおやの子ゆへのやみにまようこゝろは夜の明、日の暮るゝにもまぎるゝ事なく、つれ〳〵なるまゝに、いとし戀



しくなごりかなしさもいやまさりて、涙のみ盡ぬを、我ながら思ひわけなく、口惜しき心にもあるかな、身にまさる物なしと、かきてすてたるためしもあるに、況やこれは願ても有べき事かは、人も輕々しく心づきなしと思ふらん、いかにも今一度みるよもなくてやは有べきと、とざまかうざまに我心を慰めかねてあけ暮すに、冬も末にぞ成行まゝに、嵐烈しく、木々の梢も物さびて、何となき人つらもかなしかるべき空のけしきを、まして物思ふ身にはいとゞとりかさねつゝ、ひねもすにながめ暮して、旅の空のみ覺束なく思ひやらるゝ、我も古へ、此道を一度二度こゝにしかば、野山のけしきもいとゞよう思ひ出らるゝに、くだりたまふらんありさまも、みる心地して思ひやらるゝ。

こからしの吹につけても旅の空いかにとはかり思ひやるかな

十二月二十日ごろに、江戸より飛脚上りて、道々事ゆへなく下り給ふて、

此十日になん屋敷には着き給ひし、此の方御喜かぎりなくて、道々へも日毎に御むかひの人々奉り給ふていとやん事なく、御供の人々までいみじうもてはやさせ給ふと、きくはいと嬉くて、此程の胸少あきたる心地してなん、よろづの事さしあたりたる樣にはねしもあらぬわざなれば、忘るゝとはなけれども、年の暮には事しげく、なにくれと急ぎたつ、物騷がしきにまぎれつゝ過行程に、年も暮れぬ。いつしか年立かへるあしたの空のけしき名殘なく、曇らぬ長閑さには、かずならぬ墻根の内だに、雪間の若草色つき初めて、けしき立霞に木の芽もうち煙り、改まるしるしにや、人の心ものびらかに、ありさまども花やかにて、のゝめき渡るを、ましてこなたには此君御爲、嬉しき年の初なれば、猶世の常に事そへつゝ、壽きのかず〳〵悦事どもしてそほれあへり。物騷しき事ども過して、のどやかなるまゝに、いにし春この君のこなたにおはして、いとらうがはしく、あそびの子するゐならべ、にぎはしく遊びたわれ給ひしに、思ひかけず今年は東の春を待ち給ひて、ことさらにうつくしく思ふやうなる事ぶきを、いかばかりめでたくおかしからんと思ひやるにも、春や昔のと、まづかこたれて戀しうなん。

あら玉の年のたつ日より戀しきはふるすを出し鶯の聲

思ひやる心使はあつま路をひにいくたびか行歸るらん

かすめたゝ春や昔と忍ひてもかひなき物を東路の空

おもはすよ雲井のよそに別つゝおもかけはかり身にそゐんとは

むさし野やみとりをこめて若草のもへ出る春のほとに床しき

かくてむ月十日頃にもなりぬ。この君の御おくりにくだせしをひ人、江戸より上りつきぬ。いかにとした待けるに嬉しくて、まづ此御事きかまほし。道のほども思ひの外におとなしく、心安く下りつき給ふ。北の御方

なのめならず待喜ひ給ひて、いとかぎりもなくもてかしづき給ふ、さふらう人々も、この君のきよう に美しくおはしますをめづらしう、めもあやに見奉るけしきになん。此君もあなたの御母上にいとよくなつき給ひて、思ふやうにめやすき御ありさまにこそ、しゆりんの君もいそぎ渡り給ひて、此君にたいめんせさせ給ひて、いとうつくしうらうたしと覺して、ふろかにし給ふまじきよし、かねすゝきこゝ給ふ。めのともその まゝめし出て、御あたり近く仕うまつりなれつゝ、あけくれよのことなく、上下の人々此君の御かしづきをあつかひ草にて玩び給ふ、物思ひしらぬ心にも、思しにはすぎて、有がたきまで目出度御幸にこそと、細かに語るを聞く心、うれしなども中々いふばかりなし。あさもゝ心ゆきたる御けしきどもしるく、ことさらにつくり出たるやうに、めでたく嬉しき御有樣なれば、心ふちゐていと嬉しく、此日頃とざまかうざまに、おぼ



つかなく思ひむせびぬる胸の内も、凉しく成たる心地して、そなたに向て拜み奉る。かくてむ月も末になりゆけば、空のけはいものどやかに春あきて、軒端の梅もけしきばみ、吹來る風も匂ひふかく、墻根の若草萠出て、四方の梢も霞渡りて、長き日の徒然なるまゝに、をい人よびすへて、かしこの物語、道々の御有樣など語らせて慰む。明暮さかしき事のみの給ひて、御供の人々もかしらふりてゐちあへり。道すがら見奉る人毎に、あないつくしと、目を止めて見奉りしなど語るを、さぞあらんかし、我心の闇ばかりにも有らず、なにとなき道行人も、いみじくをかしき御有樣を見知けるにやと思ふにも、涙ぞ落つる。下り給ひし時、道にて別れ奉りし心の内など語り出るも、唯今の心地して、いとゞ戀しくなん。

忘れしよ此よの外に成ぬともありてわかれし人のおもかげ

たち別又もみぬめのうら涙にぬるゝ袂のかわくまそなき

思ひきや道こそあらめ昨日けふ同し世なからわかるへしきは
よのつねに人は見るらんうき身にはためしあらしとおもふ別を
中々にさらぬ別れの道ならは身をうきさまに思ひたへまし
いつこねてあふ坂山の岩清水あかて別しかけをみるへき
なからへは年をふるともみわの山二葉の杉のたかきしるしを
あふ事を命にかけてまつ島のあまのもしを火身もこかれつゝ
おもへともあわつの森の露きへはこのことの葉や形見ならまし
ふみおきしあと見て忍へ濱千鳥なき別にし夜半のむかしを





この一卷、慶安三の頃長月末つかた、暮はつる秋の景色も何となく寂しきに、庭の淺茅生霜枯れて、尾花が末も色變り、時雨うちそゝぎて、霧深くみわたる空に、靡かねの心細くうち鳴つゝ、いとゞ物悲しく心すごき夕の空を、しめやかに獨眺めて、越方行末の事どもを思ひつらぬるに、有爲轉變の有樣、せきくわの光、電の影、夢幻の如く、風の前の燈火よりあだなるは人の命なりけり、かゝるはかなき身を持ちて、自ら明暮いかにもして、此君に今一度逢ひ奉る世もやと、今行末をのどかに思ひ念ずるも愚なる事になんありける。けふまでもあはれとて、夜の間の程知らぬ命を頼むべき物にもあらず、まして過にし春より、むねせきあぐるやまふ出て來て、ともすれば心地惡しく惱みがちに成ぬれば、時のまもしらぬ命ぞかし、この世をさりなんうしろの事しるべきにはあらねど、我なからん跡のあらまし思ふも悲し、此君の人となり給ひて、代にたちつき給ふ

とも、誰か昔の事を語り聞かせ申べき、親のありさまなどは夢にも知り給ふまじ、あわれと思ひ出給ふとも、初もはてもなき心地こそし給ふべき、我れ此君を生み落して此かた、心を盡してをいたて、あまつさへ、はて〳〵は雲井のように別奉りて、明暮涙に沈み、年を重ぬる心の中をも、父のはかなく成給ひし有様より初めて、あやしき筆の跡に綴りかきて、我なからん跡の形見にも見せ奉らばや、人の形見にははかなき筆の跡にましたるものなし、あとは千年の形見ぞと見給ふ度に、身の古をもたどり知り給はんかしと思ひたちて、過にしかたのうれしうもつらうも有し折々、物のはし〳〵に書付置し反古どもを籠の中より求め出し、そこはかとなく書集めぬ、言葉遣賤しく、片言どもゝあらんかし、まいて歌の道は夢にもしらねば、中々おかしくかたはら痛き事どもになんあれど、他人にみせ給ふべき物にもあらず、我御目一つに御らんずるには、心得





ぬ事どものあしき所は、つみ許しても見給はんかしと、身の耻を省みず、志をしるべに書つゞけぬる物也。

思ひ川岩まによとむ水茎をかきなかすにも袖はぬれけり

かさゝ原露のきえなん夕へにもこの一ふしは思ひおかまし

木のもとにかきあつめたる言葉をはゝその森の形見とはみよ

この言の葉を書列ねて、千度よみ百度みても、過にし言の立歸たるやうにて、思ふ心の淺からず、水茎に流れそふ衣河は、袖のしがらみせきやらず。昔物語ふるき歌などさへ、我心よせなるは身にしみてあはれにもおもしろくも有わざなるを、ましてこれはうちみるより涙止めがたければ、涙草とぞ名づけ侍りぬ。

264
622

不許複製

明治四十三年十二月十六日印刷
明治四十三年十二月二十日發行

名古屋市中區東田町二丁目二百九十一番戸
編輯兼發行者　堀田璋左右

名古屋市中區榮町六丁目十一番地
印刷者　英比貞造

# 涙草

京極少將忠高女著

それ人のおやのことを悲しむ道は、思ふにもあまり、いふにも詞たらざるべし。山野のけだ物、うがのうろくず、空をかけるつばさ、つちに生るたぐひまで、すべてわきをしいけるもの、形はことなりといへども、心ざしはかわるべからず。いはんや人として上がかみ下がしもまでも、子を思ふ心のやみはひとしかるべし、こゝにようゝよはひかたぶく身に、一人のなんしをまうけぬ、めづらかにらうたき物かし。夜光きん玉の心地して、袖より外にははなしがたく、朝夕ひざの上にのみあつかひまほり暮しける。なまさかしき女ばらの、さしあつまりて申けるは、あまりゆゝ